



無限の望みを

叶えましょう

『昔々あるところに小さな蛇がいました。

蛇は人間のか弱い女の子が好きになりました。

彼女はいつも継母に虐げられていて、小さな蛇は守りたくても守れません。

そこにいたずら好きの精霊さんがやってきて、蛇の願いを受け取ると、蛇に大きな力を与えました。

蛇は二メートルを超す蛇になり、あっという間に、彼女を虐げる人間たちを呑みこみました。

しかし蛇は同時に、彼女が自分のことを怖がっていると知り、彼女までのみ込んでしまいました。

噂が広まり、人々は蛇をまつたりしてご機嫌を取ることに。

すっかり天狗になった蛇は、気が向けば村を襲うようになりました。

しかしその時、白い銃を持った青年が現れました。外見はそらの人間と同じ。

彼は蛇に銃を向けました。

蛇は自分に刃向う彼を食べようと口を開けましたが、彼の弾丸を食らうと、その場でパタリと倒れ、小さな蛇に戻り、死んでしまいました。

めでたし、めでたし。』

「だってー」

「だってーじゃないっ!!」

日本。

学校の上の桜の木の上で、小さなやり取りが行われていた。

先程女の子が落として言った本に書かれていた文を読み上げる。

木の上には、人間ほどの大きさの精霊。青白く輝いていて、服は身につけていない。けれど、人間には見えない。

もう一人は、拳銃を隠し持った、金髪の青年。

服装は、随分とラフだが、拳銃を隠し持っているので、コートを着ていた。

「てめえの尻ぬぐいの話が童話なんかにされてこ・ま・る!!」

本来人間に見えないはずの精霊の喉をつかむと、ギリギリ締めあげる。

金髪の青年は顔立ちがヨーロッパ系、日本人ではない。

優しそうな顔をしているのに、ずいぶんと言葉が荒かった。

「ああん痛い痛い。懐かしいね、懐かしいね、これって五百年くらい前の僕たちのことだよー」
へらへら笑いながら、本を指差した。

「つまり私がやってることは貴様の尻拭いだろうが、これがいくつも童話にされちゃあこっちが困るんだよ！」

「てへ☆」

精霊は舌を出して軽く笑った。

結局は精霊の尻拭いをさせられるのが彼であり、彼はもうずっと昔から生き続けている。
青年は緩いウェーブの短髪。
苗字は捨てたが、名前はアイシャルという。
今回の被害者は、ある高校のどこにでもいそうな女の子の、どこにでもありそうな願い事だった。
。

彼女のいるあの人の恋人になりたい。あの人に振り向いてもらいたい。

その願いを聞いて了承した時、彼女はどれだけ喜んだだろう。
けらけら笑いながら、精霊はずっという。
「でも結局こうなっちゃうんだね」
たった一つの思いが歴史に刻まれるほどのことになるかと思えば、ただ一つの忘れられる事件で終わる。
かつて蛇が人間を愛し、守りたいと思っただけで神の化身となり、更に邪神に変化したがためにアイシャルに退治されたように、彼女もそうなりかけた。

真夜中の校庭で、その学校の転入生としてきたアイシャルは、彼女の行動を見ていた。
やがて恋は精霊によって成就したが、欲望はもっとももっとと強くなっていく。
精霊にとって、アイシャルと自分はたちごっこの遊びをしているようなものだと思っている。
アイシャルにとって自分はやることがないからこうして精霊が遊んで作りだした災い退治をしているようなものだと思う。

目の前に広がる血の光景、右手に握られた白い銃。
控えめだった彼女はどんどん変わり、精霊に望むものを次々と告げ、精霊はそれを受け入れ、与え続けた。
欲望が欲望を産んで、肥大化してどうしようもなくなって壊れていく様が楽しいのだと、精霊が笑っていた。
最終的に彼女が望んだものは、彼を愛するものをすべて排除することだった。
彼の障害だった女を消し、そのうち彼にまわりつく他の人たちを消し、やがて自分だけを見るようにと祈り続け、彼の家族すら消し、変わっていく自分に気付かず、彼が自分だけを見ないなら彼を殺してしまおうというところまで来てしまった。
恋する少女は、やがて欲望の塊になり、精霊から渡された真っ黒のキューピッドの矢をつがえていた。

『そのあとはどうする』と精霊が聞けば、『愛しすぎて仕方がないから骨まで食べるの』と、無邪気に答えた。
そしてアイシャルが現れ、銃を向けた。無限に口から出てくる弾丸を込め、かつて少女だったものに撃ち続けた。

真夜中に呼び出した、恋人を殺そうとした少女を。

アイシャルは助ける気はない。
そうしなければまた被害が拡大するからだ。
銃をしまい、気絶した男の方を見た後、木の上を眺める。
精霊が笑っていた。

そしてまた時がたった。
全てを排除しようとした彼女は、銃殺されるという記事を出したくらいで終わった。

「またお前か」
アイシャルと精霊は、今度はイギリスにいた。
寒いところは嫌なんだけど、と厭味を吐く。

「尻拭いするの大変なんだけどね？」
真夜中、街を壊し続ける化け物を見ながら、精霊に向けて言った。
アイシャルが呆れながら、目の前の化け物に向けて、銀の弾丸を銃に詰め込む。
突然わいて出た、元が何だったかもわからない化け物に向けて、何発か派手に音を立てて銃を放つ。

消えてなくなる化け物を見ると、精霊の方を見る。
「でもさー、アイシャルは僕のこと殺そうとしないよね」
それを聞きながら、木の上に飛び乗った。

いやはや、レンガの並ぶ家が破壊されて、煙が舞っている。
折角の綺麗な街が大なしではないか。
「僕を殺せば済むことだし、出来るかもしれないのに、しないよね。理由分かっているけど」
「殺したって無限にわき出てきそうだ」
「君が最初に僕に願い事したもんね」

ずっと昔、戦場で、非力なアイシャルが望んだことは、『強くなりたい』だった。
国を守りたいわけでもなし、有名になりたいわけでもなし。
ただ、生きて家族の元に戻りたかった。
そこで彼に与えたのが、その白く透ける銃だった。ハンドガンタイプのそれは、アイシャルが口笛を軽く吹くと現れる弾丸で、沢山の化け物を葬った。

その代わり、精霊の余計なお世話で死ねない体になってしまったわけだが。
戦争が終わって、国に帰った後も精霊は付きまとい続け、精霊は厄を広げ続けた。
そのあと何度も何度も願い事をいろんな人間、生物から拾い上げては、時に歴史に残る事態にすることで、アイシャルも新たな生き甲斐を見つけた。

精霊に貰った銃と体で、精霊が生み出した結果の悪いものを排除する。
それが生き甲斐になってるから、精霊を殺さないだけ。
「あー、もう忘れたかも」

死なない、年齢が変わらないことに気付いた時、アイシャルは事故を装って死んだことになった。
勿論死体は上がらないし、彼が今も生き続けているとは知らない。
一体いつのことだろう。
銃というものが存在しない遥かな過去に、精霊によって生み出された最強の化け物がアイシャルかもしれない。

「で、次は？」
「どうしょっかな」
昔、独裁者が精霊に望みをかなえてもらい、権力を得たがためにある人種の殺戮を繰り返した。
結局は彼は何度か暗殺されかけたが、精神的に追い詰められて、自殺した。
「アレみたいに勝手に死んでくれると楽なんだけど」
「でもアイシャルは、銃を撃つときが凄く楽しそうだよ」

いたずら好きの精霊と、アイシャルはそうしてずっと一緒にいる。
日本で一人の女の子がたった一つの願いから無数の欲望を生み出し、死者を出し続け、結局アイシャルが彼女を始末することで片付いた。
面倒くさいと言いながら、心底から楽しいのかもしれない。
掌から出てくる弾丸を詰めて、相手に放つとき、精霊から見れば、アイシャルの表情は生き生きとしていた。
結局どちらも同じ、と。
自滅していかなかったのは彼だけだと思っている精霊だが、実は一番の被害者は、アイシャルかもしれない。
目に見えて自滅していないだけで、精霊が作り出す化け物を倒したことで得られる達成感が相当な快楽になっているとは、アイシャルも精霊も気づくまい。

「こうやって物語が受け継がれていくんだねー」
精霊は、図書館にやって来ては色んな本をのぞき見した。
アイシャルも本を手に取り、時間をつぶしていた。
新聞記事を見つけ出す。
さ、て、次は誰の望みをかなえようか。
精霊は考える。
さ、て、次はどんな奴が化け物になるのだろう。
アイシャルは考える。
戦争が勃発した地域の新聞を片手に、アイシャルは、精霊に見えないように小さく笑った。
「お前の尻拭いはごめんだね」

終

悪口さえも称賛に

悪口を言いたくても言えない。

そんな人たちが多いなか、ある男はストレスで参っていた。

うるさい上司、金だけが目当ての嫁、愛してくれない両親、使えない部下、歯車一つにすぎない自分。

酒を飲んで、少しでも酔っ払って思いっきり愚痴が言えたらいいのに。

でも一人でそれをしてもむなしいし、言われた方はそれを面白がって広めるものだからうかつに
いえない。

かといってストレートにお前が嫌いだと言えるわけでもない。

弱気な彼は何をすることもできない。

そこにいたずら好きな精霊が現れた。

青色の上半身だけの精霊は、彼の前で笑顔で告げる。

『皆に罵声を浴びせなよ、そうして言えば相手は真逆にとらえるよ』

夢でも見ているのかな？

起きれば、自分は一人でベッドの上にいる。

変な夢だ。罵声を浴びせろだなんてそんなこと。

片付けられていない、レトルトの並ぶ台所に行く。嫁は別室で眠っていたが、起きてきた。
相変わらずだらしのない嫁だ。

『皆に罵声を浴びせなよ、そうして言えば相手は真逆にとらえるよ』

つまりそれは気罵声を言っても、相手は称賛だにとらえるということだろうか。

試しに、言ってみようか。

「あらあなた。おはよう」

そっけない返事。いつも通り。食事は貴方勝手に買ってね、私作るの面倒だから。

いつもと同じだ。

男は勇気を出していうことにした。

「お前は本当にダメな嫁だな！金だけが目当てで結婚してる寄生虫！」

ぽかん、と、嫁はこちらを見る。

流石にいいすぎたか、まずい。

謝ろうかと口を開けたと同時に、嫁は、大喜びで目を輝かせる。

アレ？

「貴方、そんなこと思っていたの、やだ、もう、嬉しい!!仕方ないなあ、今日は簡単だけどお弁
当作ってあげる!!」

久しぶりに台所に立つ嫁を見た。

おかしいな、馬鹿にしたのにあんなに喜んで鼻歌を歌いながら、弁当を作っている。

本当に、罵声が真逆にとらえられている。

間違いない。これは本当だ、魔法だ!!

その調子で、弁当を持って、会社へ向かう。

会社にはいつもうざったい上司がいる。

静かに一人で仕事をしていると、字用紙が絡んで来てはねちねちと文句を言ってくる。

うるさい。

「うるさいですよ、邪魔なので消えてもらえませんか。貴方は本当にダメな人だ。そんなんだから離婚するんですよ。脂ぎった顔も最悪です」

いつもいいたかったことを言うと、やはり上司も一瞬驚いて、すぐに上機嫌になりだした。

上司は離婚歴がある。

それを気にしていたから、それについてちくちくいじめてみた。

上司は機嫌をよくして、男の方を軽くたたく。

「嬉しいこと言うねえ、そんなにハンサムかい？」

ちらちらと鏡に映るテレ顔を見ている。

やはり悪口が反対にとらえられる。

これで言いたい放題だ。

男は大喜びで、今までの鬱憤を晴らして、皆に向かって文句を言う。

逆にとらえられるそれは、男にとってストレス解消。

逆にとらえられた方は、酷くいえばいうほど賛辞を述べられているように聞こえるので、まさに男にとって好都合だった。

「で、お前は今度は何を引っかけたんだ」

ビルの上、血まみれで倒れる人間を背にして、白い銃を持った青年が喋り出す。口から弾丸がでてくる。それを銃に込める。

青い目に金の髪、異国の青年だ。

隣には、男が見た精霊がいる。

「変な化け物作ったんじゃないだろうな」

青年が毒づいて、銃を放り投げた。銃は地面に着地する寸前で消えた。

『変なこと言ってないよー。化け物なんてできるものじゃないもの。ちょっと遊んでるだけ』

「いや予感しかしない」

『万が一化け物になったらアイシャルに頼むね!』

「断る」

男はどんな文句を言っても賛辞を述べられることに気を良くした。

そうして暴言を浴びせ続けたある日、とても綺麗な女性が目に付いた。

会社の新入社員だという。

頭もいいし、綺麗だし、何より気が強いのが男が気にいった要素だった。

ちょっと浮気もいいよね。今ならどんだけ悪態ついても、浮気のいいわけではなく、賛辞に聞こえてしまう。

「ねえねえ」

「はい？」

女性は柔らかな笑みをたたえながら、男に向いた。

一方でその様子を見ている精霊たち。

ビルの向こう、男が女に声をかけている。

「何の望み叶えたの」

『悪口言いたい放題』

「その原理は？」

『いったことが真逆に相手に伝わる』

無邪気に答える精霊に、確かにこれは化け物ができるレベルではないということに気付いた。

が、もうそれで気づいた。まさに今くどうとしている男を見て。

「とても綺麗ですね、仕事もできるし、強気な性格、何もかも!!よければ、今日食事に行きませんか。美人と一緒に食事をしたいです」

その途端、女の顔は鬼のように変わり、男の顔をひっぱたいた。

え、何で？

激痛を感じ、他の社員の冷たい視線を感じ、男は謎に思う。

次の瞬間には、社員全員から罵声を浴びせられる彼がいた。

「いったことが真逆に伝わる、かあ」

『ね、その通りでしょ』

化け物はできないけれど、男の生活が壊れるだけだしな。

いたずら好きの精霊はどうでもいいようなことをおまけにくつつける。

大昔に戦場でアイシャルが強くなりたいという望みがかなえられたと一緒に、永遠に精霊の叶えた望みで化け物になった人間を始末しづける羽目になった。

自分の国を作りたいと思った男は傲慢になっていき、カリスマ的な人間になったと同時に何とも暗殺をされかけて、神経を消耗して自殺した。

やはり強くなりたいと思った人間を人間以上の力を与えて、化け物になってしまったり。

挙げればきりが無い。

そんなものを作り続けてきた精霊にしては随分小さい望みをかなえたな。

「あの効果はいつまで？」

蹲る男を見ながら、アイシャルは問う。

『えっとねえ、死ぬまで』

「私はどうでもいいけど、あれじゃあの男、まずいんじゃないの。褒めたことも真逆にとらえられるんだろ。言い訳しても言い訳じゃなくなるし」
頷く精霊を見て、アイシャルはビルの上から姿を消した。

さて、言ったことが真逆に伝わるようになってしまった男が、このあとどう暮らしていったかは知らない。

終

全ての始まり

嫌だ、帰りたい。

嫌だ、こんなところで死にたくない。

誰か、誰か。

金の髪に青い目の少年は泣きながら叫んだ。

年代は分からない、青銅の剣で戦っていた時代。

国は荒れて、吸収合併を繰り返し、戦争のために十八前後のその少年も、強制的に戦場へ連れて行かれた。

戦場では安っぽい武具を纏い、少年はがたがたと震えていた。

いくつ死体を見てきたかわからない、目の前で人が死んでいく光景を見て、少年は何もできず、水を求めて不思議な森に訪れた。

森に囲まれた湖の水は澄んでいて、のんで見れば少しは恐怖は和らいだ。

怖い、怖い、何もできない。

家族が待っている、生き残りたい、生きて帰りたい。

まだ幼い弟、可愛い妹、大事な母親、死んだ父。

あの家に帰らせてくれ!!

少年が叫ぶと、ふらりと青い物体が現れた。

時刻は夕方、それは青白く光っていた。

よく近づいて見れば、人の姿をした、耳の長い小さな人間。ただし下半身はない。

『強くなりたい？死にたくない？』

唐突に相手は聞いてくる。綺麗な目、無邪気な顔。

少年はそれに頷いた。

「生きて帰りたい、死にたくない」

それが願いだった。

その願いを了承すると、精霊は笑う。

少年はすぐにその場で白い、妙なものを渡された。

現在で言う銃であるが、少年は見たことがなく、触ったこともないため、それが武器と認識できなかった。

白く光るそれは重さはない。

それにしては随分硬いような気もする。

一体何で出来ているのだろう？そう思いながら、適当にガチャガチャといじくっていると、精霊と名乗るそれは、トリガーを引いて弾を詰めればいいと説明を始めた。

何を入れるって？トリガーとは？そんな質問を繰り返す少年に、精霊は答える。

『息を吐いてごらん』

言われるままに吹いてみると、白い物体が口から出てきた。

『これはね一、もっと未来の武器なの。殺傷力はそんな壊れやすいもので出来たものよりよっぽど強いよ』

言われるがままに詰めいていき、少年はそれを使いこなすように言われ、森で三日ほど過ごす。部隊に戻ると隊長が大声で怒鳴りつけてきたが、道に迷ってしまったと聞けば、許してくれた。

そして手に持つ白い銃に目がいく。

が、全員が何かの玩具だろうと思い、何も言わなかった。

かくして戦争は終わる。

白い銃は人体も石も砕くほどの威力であり、無限に出てくる球を詰めれば、いくらだって撃つことができた。

しかもそれは、隠すこともできる。

だがそれと同時に、口からそれにまつわるものが出てきた時点で疑うべきだったのだ。

家に帰った時、家族に迎えられた。

そして時がたったが、おかしいと少年は思った。

彼だけが年齢が、少なくとも見た目が変わらないのである。

弟が彼を追い越すほどの体格になり、年齢にふさわしい大人になる。

妹は小じわが入り始めて、落ち着いた雰囲気を見せる。

しかし少年はどこまでも昔のまま。あの頃のままである。

もう四十になるというのに、少年は十八歳のままで、髪は白髪にすらなることもなく、大人っぽくなることもない。

しかしそんなことはどうでもよかった。

少年は、それ以後使うことのなくなった銃を、一人部屋の中時々出して見せては眺めていた。青銅で接近戦で戦っていたのに反し、遠距離から標的を狙い、上手くいけば相手はその一撃で倒れる。

その強さに惚れ込み、また使いこなすことに快感を覚えていた。

派手な音はするが、もう慣れた。

最初は鼓膜が破れるかとも思ったが、今はそれすら、振動すら心地いい。

けれど平和になってしまえば用済みなのだ。

そんな折、また精霊が現れた。

『それもっと使いたい？』

少年は頷いた。

もう本当の年齢は少年ではないが。

次の願いだった。

精霊の望みと少年の望みは、いわゆる共依存だった。

精霊はそれ以後何度も人の望みをかなえたが、ほとんどがおかしな方向に行って自滅してしま

うという。

そしてたまに、化け物が誕生してしまい、手に負えない。

それに対し、少年は銃を使い、殺めることを願った。

少年は、ある日事故を装って、死んだことになった。

不老不死になってしまったことを知ったからであった。

時は経つ。目まぐるしく変わる歴史の中、少年は変わらず、精霊も変わらない。

怯えていた、ただの少年の性格が大きく変わってしまったが、それは彼にとってどうでもよかった。

金髪の少年、アイシャルは今もなお銃を手にして精霊の作り上げた化け物退治をしている。

『今日もお願い』

無邪気に言う精霊に、アイシャルは答えた。

「どこに何が出来たって？」

コンクリートでできた街をさまよいあるく。マンションの一室に、部屋に収まりきらなような化け物が暴れている。

何を叶えてあんなになったのかは知らないが、それを標的に、弾丸を込める。

一発、二発。

化け物が人の形になって崩れ落ちるのを見届けた後、すぐに身を隠す。

そして最後アイシャルの望みは、『精霊が作った化け物を倒すこと』だった。

ではなぜ不老不死になったのか？

それは彼が叫んだ、「死にたくない」という望みを精霊が叶えてしまったからである。

また、精霊が願いを初めて叶えた相手が少年であった。

終

没予定だった。

ImmortalManと宿屋あやかしを考えて眠った後、見た夢がこんな感じだったので、文章にしたものの、長い嫌!!と、短編にしました。

出来上がったらかなりの厨二病になったので、お蔵入り予定でしたが、ついさっき物凄く厨二病だけど人気のある曲を聴いたので「まあ、ありが」とUPしました。

表紙と、絵のためどころに晒した以前のアイシャル比較。



とっとと仕上げたかったので、結構な勢いで雑。



この時点で未発表作品になっています。

服は時代と場所に合わせて変わっていくとかそういう予定なので違います。
容姿がどこにでもいそうな外人にならんとはいけんかったので、金髪碧眼。

やたら表紙の方が悪人顔。

番外

悪口を反対とらえられる。

この精霊がかなえることなので、余計な機能をつけてしまいました。

アイシャルの後ろの血まみれの男は、精霊が作った化け物の残骸でした。

でも真逆になった男は、アイシャルに始末もされません。

また夢がきっかけ。

無限の望みを叶えましょう

<http://p.booklog.jp/book/40955>

著者：香吾悠理(エビル)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuuri15/profile>
<http://yuuri15.huu.cc/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40955>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/40955>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.